

# 大学生の適応に関する研究

—— 自己意識と対人関係の視点から ——

## A study on the adjustment of university students

—— From viewpoints of self-consciousness and interpersonal relation ——

田 中 存 菅 千 索  
Tamotsu TANAKA Sensaku SUGA  
(教育学研究科14期生) (心理学教室)

2008年10月 3 日受理

### はじめに

青年期とは人間の発達段階の上で児童期と成人期の間に位置する、子どもから大人への移行期をさす。ルソーは著書『エミール』の中で、青年期にあたるものとして、15歳から21～23歳を「第2の誕生」と規定し、社会的人間としての基礎を完成する時期と捉えている。この時期には心身両面で顕著な発達がみられ、自我の目覚めや性の目覚めによって自己の内面への関心が増大し、自分の行動や態度を自己の意志によって決定しようとする。自ら主体的に自己を形成し、成長していくため、それまで依存してきた親から心理的に独立しようとする時期でもある。また、身体的な面で第二次性徴の発現に違和感や戸惑いを覚えることがある。この変化が青年の心に動揺を与えたり、不安を引き起こしたりする。

知的な面では想像力や内的世界を豊かにし理想主義的傾向と現実への批判的傾向をもたらし、自己意識を強め、自己理解を進めていく。情緒面では情緒を抑えたり歪曲したりする傾向(歪曲性)、情緒の原因が漠然として本人も周りも理解困難な傾向(漠然性)、愛憎などの情緒を長期間持続させる傾向(激情の持続)、尊敬と軽蔑、歓喜と悲哀、得意と失意のように情緒が極端に揺れ動く傾向(動揺性)などがみられる。

人格面では自我の発見やアイデンティティの発達がみられる。そのため、一般的に青年期は心理的に不安定となる時期であるという捉え方がある(Ackerman, 1958; Greenacre, 1970など)。発達の側面で見ると、児童期までの子どもは、まだ自己の感情や欲求を統制する自我の発達が十分ではなく、青年期以降では、その発達が目覚ましく見受けられる。そのため、年齢を重ねることで集団生活に適応する能力が身につけていくと考えられている。

適応とは、個人と環境の相互作用(八木・篠原, 1989)や個人と環境の関係(福島, 1989; 近藤, 1994; 佐々木, 1992)を表す概念である。また、適応感とは、適応そのものを意味する概念ではなく、個人と環境との主

観的な関係によって規定されるものと考えられている(反町, 1994; 谷井・上地, 1994)。そのため、適応感とは個人の適応を測る1指標としてとらえられるものだと考えられる。ここでは、適応・不適応を状態的なものとみなして、適応感・不適応感を個人が感じる主観的なものとして捉える。文部科学省による平成18年度の調査によると不登校の児童・生徒数は小学校で全体の0.33%(302人に1人)、中学校で全体の2.86%(35人に1人)と報告されている。全体でも不登校の児童・生徒は平成14年以降減少傾向がみられたが、昨年再び増加しており、深刻な状況にあるといえる。また、不登校の児童・生徒は学年が上がるにつれて明らかに増加している。不登校になったきっかけと考えられる状況として、本人の問題に起因する“その他本人に関わる問題”(小学校で30.2%、中学校で31.4%)、が高い割合を占めている。本人に関わる問題としては、学校へ行く意味が見出せないと感じているのかもしれない。

近年、大学生における大学生活不適応の増加が指摘されてきている。1970年代後半から80年代にかけて盛んに指摘された大量留年やスチューデント・アパシーといった大学生特有の問題に加え、不登校を中心とする不適応状態が大学生にまで拡大しているとも考えられる。不適応の中にも大学に行くことができない、あるいは行かない学生は存在している。また、中途退学者の問題が挙げられる。退学の理由として不本意入学、入学後の不本意感、入学した学部や学科への不適応、大学生活への不適応などが挙げられる。小林(2000)は入学後の不本意感についての要因として、授業が面白くない(興味が無い、難しい)、履修登録を失敗した、単位が取れない、教員への違和感、自らの適性に疑問が出てきた、情報不足から入学後にその学部・学科では自分がやりたいことができないとわかったなどを挙げている。このような理由により、まず不登校傾向がみられ、次いで不登校となり、最終的に退学するというプロセスが考えられる。

今の大学生は自分の大学生活に対してどれほど適応感を感じているのだろうか。まず、大学生の実態を考

えてみると、1回生から2回生、3回生と学年が上がると、一般的には4回生で卒業を迎えることとなる。そして、その学年ごとに課題や問題は異なってくる。1回生では、新たな学校生活の始まるの年であり、大学生活に慣れること、友人関係の構築、授業単位の修得などが挙げられ、2回生でも授業単位が挙げられる。3回生になると専門教科の授業が入り、ゼミの授業も入ってくる。また、後半になると就職活動が入ったりし、大学卒業後のことを考え始める時期でもあるだろう。4回生では大学卒業における最後の関門である卒業論文が待ち構えている。一般に大学生生活が長いほど大学適応感が高くなると予測することができる。田中・菅(2007)では4回生よりも1回生の方が大学不適応は高かった。菅ほか(2006)では3回生以上が1回生および2回生よりも適応得点が高いことを明らかにしている。そのため学年が上がるほど適応感は高くなり、不適応感は低くなるであろう。

また青年期の終わりの時期の発達課題として一貫した自己概念であるアイデンティティの確立が挙げられる。一般的に意識の主体を自我とよび、意識の対象としての自我を自己と呼ぶ。そのため、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立とは自己を形成する1側面として考えられる。杉村(2005)はアイデンティティを他者の期待や欲求、関心を考慮する一方で、自己の欲求や関心を認識したり表現したり、そこで生じた自己と他者の間の不一致を、相互調整によって解決する作業を通して形成されるものとしてと捉えている。宮沢(1988)や沢崎(1994)によるとアイデンティティの確立の時期とされる青年期において、ありのままの自己を受け入れる自己受容が重要な役割を果たすと考えられてきた。そのため、アイデンティティの確立を自己形成と考えるならば、自己受容も自己形成を考える上で重要といえる。また、Rosenberg(1965)によると「Self-esteemは、特別な対象すなわちselfに対するポジティブまたはネガティブな態度であることが知られている。しかし、そこにはふたつの全く異なる内包的意味がある。ひとつは、高いSelf-esteemの持ち主は、自分を『very good』とみなしている人であるということ、もうひとつは、自分を『good enough』とみなしている人であるということである」と述べ、自らの尺度は『good enough』の方を反映するものであると定義している。したがって、ここでのSelf-esteemとは今の自分に満足している状態を指すものと考えられる。

本研究では、自己意識をアイデンティティの確立、自己受容、セルフ・エスティームの3つの視点から捉え、適応感または不適応感との関係について検討することを目的とする。

## 方法

**被験者：**和歌山大学教育学部の学生132名であった。このうち欠損値が見られたものは削除した。最終的には19歳から22歳までの学生121名(男子46名、女子75名)が分析の対象となった。調査に先立って回答させた結果からは、2回生53名、3回生60名、4回生8名であった。また「自宅生」62名、「自宅外生」59名、「クラブ(サークル)活動をしている」84名、「クラブ(サークル)活動をしていない」37名、さらに「クラブ(サークル)活動をしている」ものの中では「文化系」に属しているもの36名、「体育系」に属しているもの46名、両方ともが2名であった。

**質問紙：**以下に示す4種類について評定させた。

- (1)**適応尺度：**大学生活を中心とした現在の適応状況の程度を調べる8項目を作成した。さらに、藤井(1998)から大学生活不安尺度の下位尺度である大学不適応感尺度5項目を引用し、それらを合せた計13項目からなる適応尺度を構成した。回答は4段階評定で求めた。
- (2)**アイデンティティ尺度：**下山(1992)が作成したものを使用した。この尺度は2つの下位尺度となるアイデンティティの確立尺度10項目とアイデンティティの基礎尺度10項目で構成されている。回答は4段階評定で求めた。
- (3)**自己受容尺度：**沢崎(1993)が作成したものを使用した。「ありのままの自分をそのまま受け入れている状態」である自己受容の個人差を測定する尺度である。回答は5段階評定で求めた。
- (4)**SE尺度：**Rosenberg(1965)によって制作された10項目からなるSE尺度の日本語版(星野, 1970)を用いた。ここでのセルフ・エスティームとは、他者と比べて自分が優れていると感じているかどうかではなく、あるがままの自分に満足できているかどうかを測定している。回答は4段階評定で求めた。

**手続き：**大学の講義時間中、集団形式で実施した。『記入の際はあまり深く考えず、ありのまま答える』よう教示を与えた。質問紙は適応尺度とSE尺度を合わせたもの1枚、アイデンティティ尺度1枚、自己受容尺度1枚の計3枚からなる。回答する順序による影響を考慮し、回答させる順序の異なるものを6パターン用意し、カウンター・バランスをとった。所要時間は10分から15分程度であった。

**調査時期：**2007年7月下旬。

## 結果

**因子分析：**適応尺度13項目について因子分析を行った。はじめに主成分分析を行った結果、固有値1.0以上の因子が2因子抽出された。さらに固有値の変動および解釈のしやすさなどを考慮し、2因子を採択しバリマックス回転を行った。その結果これらの2因子が説明する分散は61.82%であった(Table 1)。因子1は「大学生活が楽しい」、「大学生活で充実感や満足感を覚えることがある」、「学校になじんでいると思う」など大学生活に対して良い印象を持っている、適応していると考えられる項目にマイナスの因子負荷量が高く、「大学を退学したいと思うことがある」、「できることなら、転学あるいは転部したくて仕方がない」、「こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがある」など大学生活の不適応と考えられる項目の因子負荷量が高いため大学不適応感因子と命名した。因子2は「大学の「講義」に満足している」、「現在、積極的に学業に取り組んでいる」など学業面

の充実感と考えられる項目の因子負荷の値が高いため学業意欲因子と命名した。分析の際は、回帰法による因子得点を用いた。

**各測定変数における平均の群間比較：**得られたデータの全体および各群間における各測定変数の平均値と標準偏差をTable 2に示す。学校不適応感と学業意欲をそれぞれ従属変数、各群を独立変数とする2要因(2×2)分散分析を行った。なお、学年に関しては、2回生・3回生・4回生の3群のデータが得られたが、2回生・3回生に比べ4回生が極端に少なかったため、比較の対象としては除外した。その結果、学業意欲で性別に主効果がみられ、平均値は男子の方が高かった(Table 3)。さらに学年別の性差をみると、2回生で性差がみられ、平均値は男子の方が高かった。しかし、その他の学年では性差はみられなかった。そのため、学業意欲に関していえば、2回生でみられた性差が全体に影響したものだと考えられる。以下の検定では全体での分析の他に学年別、性別、住まい別、クラブ活動の有無についても分析することとした。

Table 1 適応尺度の因子負荷量

項 目 内 容	F1	F2	共通性
大学生活が楽しい	-0.91	-0.08	0.821
こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがある	0.85	0.15	0.707
大学を退学したいと思うことがある	0.84	0.20	0.722
できることなら、転学あるいは転部したくて仕方がない	0.82	0.24	0.728
大学生活で充実感や満足感を覚えることがある	-0.81	0.06	0.664
大学生活になじんでいると思う	-0.79	-0.10	0.656
今の大学を選んでよかったと思う	-0.77	-0.29	0.678
この大学にいて、何か不安な気持ちになる	0.75	0.09	0.564
入学した学部が自分に合っていないような気がして不安である	0.68	-0.09	0.453
大学生活で孤独感を覚えることがある	0.55	-0.29	0.411
大学の「講義」に満足している	0.18	0.73	0.288
現在、積極的に学業に取り組んでいる	-0.15	0.70	0.223
現在、学業以外に悩んでいるがある	-0.19	-0.68	0.336
寄 与	6.23	1.81	
寄与率	47.94	13.88	

Table 2 各変数の平均値(上段)と標準偏差(下段斜体)

	全体	性別		学年			住まい		クラブ活動をして		系統	
		男子	女子	2回生	3回生	4回生	自宅	自宅外	いる	いない	文科系	体育系
大学不適応	0.00	0.06	-0.03	-0.07	-0.01	0.57	0.00	0.00	0.01	-0.01	-0.06	0.01
	0.97	0.99	0.96	0.95	0.99	0.89	0.97	0.98	0.98	0.98	1.09	0.94
学業	0.00	0.18	-0.11	-0.03	0.04	-0.12	0.08	-0.08	-0.02	0.04	-0.08	0.01
	0.80	0.85	0.75	0.74	0.83	1.05	0.78	0.81	0.80	0.81	0.83	0.79
アイデンティティの確立	27.21	28.24	26.35	26.25	27.77	29.50	26.82	27.29	27.19	26.74	26.41	28.50
	5.81	5.86	5.86	5.60	6.12	3.82	5.87	5.98	5.61	6.60	6.66	4.76
アイデンティティの基礎	25.57	26.40	25.04	24.79	26.22	25.88	25.75	25.34	25.12	26.51	24.41	26.14
	5.37	4.50	5.79	4.70	5.85	5.87	5.83	4.89	5.35	5.35	5.10	5.43
精神的自己	47.99	49.36	47.14	46.32	49.42	48.38	47.19	48.75	48.08	47.71	48.91	48.16
	10.17	10.34	9.88	8.62	11.05	12.30	10.73	9.37	9.61	11.16	10.36	10.04
SE尺度	24.89	25.12	25.20	24.85	25.17	23.13	25.37	24.96	25.18	25.14	24.97	24.93
	2.69	6.24	5.86	2.60	2.62	3.40	6.20	5.80	5.62	6.79	6.42	5.53



Table 3 学業意欲を従属変数とする 2 要因分散分析

従属変数	変動因	SS	df	MS	F	p
学業意欲	学年	0.06	1	0.06	0.092	n.s.
	性別	2.70	1	2.70	4.484	p<0.05
	学年×性別	1.56	1	1.56	2.586	n.s.
	誤差	65.54	109	0.60		
	全体	69.68	112			

**適応尺度と関連変数との相関係数：**適応尺度と関連変数との関係性を調べるため、相関分析を行った。まず本研究の従属変数である大学不適応感と学業意欲との積率相関係数を求めた結果、2 回生、クラブ活動をしている群で正の相関、クラブ活動をしていない群では有意な傾向の負の相関がみられた。つぎに従属変数である大学不適応感と学業意欲、独立変数であるアイデンティティ尺度の下位尺度であるアイデンティティの確立とアイデンティティの基礎、精神的自己、SE尺度との積率相関係数の全体および各群別に求めた (Table 4、Table 5)。その結果、大学不適応感と独立変数との相関係数では、全体でアイデンティティの確立との間にのみ、正の相関がみられた。2 回生、男子群、自宅外群ではアイデンティティの確立との間で正の相関がみられた。また 2 回生では、SE尺度との間で有意な傾向の負の相関がみられた。その他では相関がみられなかった。

Table 4 大学不適応感と独立変数との積率相関係数

	アイデンティティ尺度		自己受容尺度	SE尺度
	確立	基礎	精神的自己	SE
全 体	0.25**	0.04	-0.02	-0.07
2 回生	0.40**	0.16	0.05	-0.24†
3 回生	0.09	-0.13	-0.14	0.10
男 子	0.39**	0.19	0.19	-0.06
女 子	0.15	-0.06	-0.18	-0.08
自 宅	0.18	0.03	-0.04	0.01
自宅外	0.31*	0.04	-0.01	-0.17
クラブ有	0.34	0.10	-0.01	-0.14
クラブ無	0.06	-0.10	-0.05	0.07

注：有意確率は\*\*：p<0.01, \*：p<0.05, †：p<0.10

Table 5 学習意欲と独立変数との積率相関係数

	アイデンティティ尺度		自己受容尺度	SE尺度
	確立	基礎	精神的自己	SE
全 体	0.23*	0.12	-0.02	-0.12
2 回生	0.33**	0.15	0.14	-0.14
3 回生	0.22†	0.13	-0.05	-0.11
男 子	0.21	-0.26†	-0.33*	-0.41**
女 子	0.20†	0.31**	0.17	0.03
自 宅	0.25†	0.16	0.12	-0.12
自宅外	0.21	0.07	-0.16	-0.10
クラブ有	0.31	0.17	-0.07	-0.24
クラブ無	0.08	0.00	0.09	0.07

注：有意確率は\*\*：p<0.01, \*：p<0.05, †：p<0.10

学業意欲と独立変数との相関係数では、全体、2 回生でアイデンティティの確立との間にのみ正の相関がみられた。3 回生ではアイデンティティの確立との間に有意な傾向の正の相関がみられた。男子群では学業意欲とSEとの間に負の相関がみられ、精神的自己との間に負の相関がみられた。また、アイデンティティの基礎との間で有意な傾向の負の相関がみられた。女子群ではアイデンティティの基礎との間に正の相関がみられ、アイデンティティの確立との間に有意な傾向の正の相関がみられた。自宅生ではアイデンティティの確立との間に有意な傾向の正の相関がみられた。その他では有意な相関係数は得られなかった。

**適応尺度と関連変数との重回帰分析：**大学不適応感と学業意欲を従属変数、アイデンティティ尺度の下位尺度であるアイデンティティの確立とアイデンティティの基礎、精神的自己、SEを独立変数とする重回帰分析を、全体および各群別に強制代入法で行った (Table 6、Table 7)。その結果、大学不適応感での重相関係数(R)の検定の結果、全体、2 回生、女子群、クラブ活動をしている群で有意であり、自宅外群では有意な傾向であった。3 回生、男子群、自宅群、クラブ活動をしていない群では有意でなかった。また 2 回生、女子群、クラブ活動をしている群の重相関係数(R)は全体を基準として、相対的に低かった。標準偏回帰係数( $\beta$ )についてみていくと、全体、2 回生ではアイデンティティの確立が高くSEが低いほど大学不適応感を抱きやすいということが示された。女子ではアイデンティティの確立が高く精神的自己が低いほど大学不適応感を抱きやすいという結果が示された。また、自宅外群、クラブ活動をしている群ではアイデンティティの確立が高いほど大学不適応感を抱きやすいということが示された。

学業意欲での重相関係数(R)の検定の結果、全体、男子群、クラブ活動をしている群で有意であり、女子群で有意な傾向を示していた。2 回生、3 回生、自宅群、自宅外群、クラブ活動をしていない群では有意でなかった。また重相関係数(R)は全体と比較し男子群は高く、女子群はやや低かった。この結果から全体、女子群と比較し、男子群の予測の精度が高いということがいえる。標準偏回帰係数( $\beta$ )についてみていくと、全体ではアイデンティティの確立とSEが高く、精神的自己が低いほど学業意欲を抱きやすいということが示された。男子群ではアイデンティティの確立が高く、精神的自己とSEが低いほど学業意欲を抱きやすいということが示された。女子群ではアイデンティティの基礎が高いほど学業意欲を抱きやすいということが示された。クラブ活動をしているものもアイデンティティの確立が高く精神的自己が低いほど学業意欲を抱きやすいということが示された。

Table 6 大学不適応感を従属変数とする重回帰分析の結果

因子	重相関係数 R	自由度調整済 R <sup>2</sup> 乗	標準偏回帰係数 $\beta$			
			アイデンティティ尺度		自己受容尺度	S E 尺度
			確立	基礎	精神的自己	S E
全体	0.590***	0.324	0.23*	-0.10	-0.10	-0.52***
2 回生	0.498**	0.186	0.48**	0.05	-0.20	-0.24†
3 回生	0.350	0.059	0.42*	-0.13	-0.32†	0.26†
男子	0.390	0.069	0.37*	0.06	0.01	0.01
女子	0.359*	0.079	0.39**	-0.04	-0.38*	0.00
自宅	0.277	0.012	0.37*	-0.02	-0.25	0.09
自宅外	0.370†	0.073	0.37*	-0.03	-0.12	-0.12
クラブ有	0.398**	0.116	0.43***	-0.03	-0.17	-0.10
クラブ無	0.217	-0.072	0.26	-0.15	-0.10	0.15

注：有意確率は\*\*\*：p<0.001, \*\*：p<0.01, \*：p<0.05, †：p<0.10

Table 7 学業意欲を従属変数とする重回帰分析の結果

因子	重相関係数 R	自由度調整済 R <sup>2</sup> 乗	標準偏回帰係数 $\beta$			
			アイデンティティ尺度		自己受容尺度	S E 尺度
			確立	基礎	精神的自己	S E
全体	0.478***	0.200	0.42***	0.13	-0.29*	0.38***
2 回生	0.364	0.060	0.34*	0.01	-0.02	-0.15
3 回生	0.325	0.040	0.34†	0.15	-0.33†	0.05
男子	0.611***	0.312	0.40*	-0.21	-0.38*	-0.27*
女子	0.332†	0.059	0.09	0.33*	-0.08	0.10
自宅	0.256	0.000	0.25	0.05	-0.06	-0.05
自宅外	0.361	0.066	0.33*	0.10	-0.34*	0.01
クラブ有	0.441**	0.154	0.39**	0.10	-0.27*	-0.16
クラブ無	0.166	-0.094	0.11	-0.13	0.12	0.11

注：有意確率は\*\*\*：p<0.001, \*\*：p<0.01, \*：p<0.05, †：p<0.10

## 考察

大学生は自分の大学生生活に対してどれほど適応感または不適応感を感じているのだろうか、また青年期の終わりの時期にあてはまると考えられる大学生に対して、自己形成はどれほど適応感または不適応感と関わっているのかという問題意識から、質問紙による調査を行った。

本研究で作成した適応尺度について因子分析を行った結果、大学不適応感因子と学業意欲因子の 2 因子が抽出された。各因子得点をそれぞれ従属変数とし 2 要因分散分析を行った結果、不適応尺度では学業意欲で性差が見られ、男子の方が女子よりも高かった。学業意欲に関しては、全体でも男子の方が相対的に高く、女子の方が相対的に低かった。この結果は、男子と比べて女子の方が学業という面に関して現状に満足していないということなのかもしれない。適応感では学年が上がるにつれ高くなることが予測されたが、そのような結果は得られなかった。2 回生と 3 回生は大学生の真ん中の学年にあたり、大学生生活も 1 年以上が経過し慣れがでてきているのだろう。また、調査の時期が夏休み前ということも関係しているのかもしれない。

そのため、2 回生と 3 回生とは異なる集団と考えるよりも同一集団もしくは個人差とみなしていくべきなのかもしれない。4 回生は比較の対象として除外したが、大学不適応感を感じている学生は全体を基準として相対的に高かった。その理由として、教育学部の学生を対象としたため、4 回生にとっては教員採用試験の時期であり、教員を目指す学生にとってはなによりも重要な時期であることが影響しているのだろう。さらに卒業論文を意識せざるを得ない時期であるということも考えられる。

大学不適応感と学業意欲の関係を全体および各群別に相関を求めた結果、全体では相関がみられなかったが 2 回生、クラブ活動をしている群、クラブ活動をしていない群で有意な相関係数が得られた。大学生にとって学業は本業であり、重要なことであるはずなので大学不適応と学業意欲との間にはある程度の負の相関が予測された。しかし、2 回生とクラブ活動をしている学生では正の相関が示された。逆にクラブ活動をしていない学生との間には負の相関がみられた。一般に大学生生活に不適応を感じている人は対人関係において何らかの悩みやトラブルを抱えていると思われる。友人関係や仲間関係でうまくいかなことを原因として考

えるなら、大学不適應感と学業意欲が正の相関関係にある場合、学生生活で力の入れるところとして学業しか残っていないのかもしれない。2 回生やクラブ活動をしている学生に関していえば、学習意欲の低下が示唆されるのではないだろうか。クラブ活動をしている学生であればクラブ活動の方に力を注ぐあまり、むしろ学業面がおろそかになるのかもしれない。その逆にクラブ活動をしていない学生では不適應感を感じているものほど学業意欲が低く感じる可能性が示唆される。

つぎに適應尺度とアイデンティティ尺度、精神的自己、セルフ・エスティームとの関係性については、全体と各グループとでは、大学生活の不適應の程度を予測する変数の組み合わせとその影響が異なることが示された。全体では、アイデンティティの確立とセルフ・エスティームとの組み合わせが有効であることが明らかとなった。アイデンティティの確立が高く、なおかつセルフ・エスティームが低いほど、大学への不適應感を抱きやすいということが予測される。さらにセルフ・エスティームが低いほど、より不適應感を抱きやすいと予測される。2 回生でも全体に近い傾向が見受けられる。ただし、セルフ・エスティームよりもアイデンティティの確立の影響の方が強く、アイデンティティの確立が高いほどより不適應感を抱きやすいと予測される。女子ではアイデンティティの確立と精神的自己との組み合わせが有効であることが明らかとなった。アイデンティティの確立が高く、なおかつ精神的自己の受容が低いほど、大学への不適應感を抱きやすいということが予測される。自宅外生、クラブ活動をしている学生ではもっぱらアイデンティティの確立だけが回帰式に寄与していた。アイデンティティの確立が進むにつれ、学生としての自己像をアイデンティティ形成に繰り込むことで適應感が増すと考えていたが、必ずしも適應感につながるものではないことが示された。むしろアイデンティティの確立は不適應感との間に正の相関が示されている。大学生活の適應との関係をみるのであれば、学生である自己に満足しているか、受け入れることができているかという視点も必要なのだろう。2 回生で大学不適應感とセルフ・エスティームとの間には負の相関がみられた。アイデンティティが確立されていながらもその状況に満足していないため、不適應感を感じやすいことが考えられる。

学業意欲に関しては、アイデンティティの確立、精神的自己、セルフ・エスティームを組み合わせることが有効だと考えられる。全体と男子では、アイデンティティの確立、精神的自己、セルフ・エスティームを組み合わせることが有効ではあるが、各群でセルフ・エスティームに違いがみられる。また全体では、アイデンティティの確立とセルフ・エスティームが高く、精神的自己の受容が低い、すなわちアイデンティティが確立され精神的な受容がなされていなくとも現

状の自分に満足していれば学業意欲は高まると考えられる。男子ではアイデンティティが確立され、精神的な受容がなされていなく、現状の自分に満足できていないほど学習意欲が高まるという結果が示された。それに対して女子はタイプが異なり、アイデンティティの基礎が回帰式に寄与していた。アイデンティティの基礎が高まることで学業意欲が高まるということが予測される。自己形成に焦点を当てた大学生活の適應感・不適應感をみてきた。自己形成がされているほど大学生活に適應しているのではないかと考えられていたが、必ずしもそのような結果ではなかった。自己形成がされていても現状の自分に満足しているかどうかということも重要だと考えられる。現状に満足しているとしてもそれが大学生活のみをさすものではないという視点も必要だろう。

## 要約

大学生が自分自身の大学生活に対してどれほど適應感または不適應感を感じているのだろうか。またどのような要因が適應感または不適應感と関わっているのだろうかという問題意識から研究を行った。本研究では自己形成をアイデンティティの確立、自己受容、セルフ・エスティームの3つの視点から捉え、適應感または不適應感と自己形成との関係を教育学部の大学生121名を対象に質問紙調査を実施して検討した。性別では学習意欲に関しては性差がみられ、男子の方が女子よりも高い学習意欲がみられた。住まい別では学年を考慮することで、適應感に違いがみられることが示された。自宅外生は2 回生で適應感が高いが、3 回生になると適應感が下がる。逆に自宅生は2 回生の時に適應感が低いが3 回生になると適應感が高まる。全体では自己形成の視点からは、アイデンティティの確立が高く、セルフ・エスティームが低いほど、大学への不適應感を抱きやすいということが考えられる。アイデンティティが確立され精神的な受容がなされていなくとも現状の自分に満足していれば学業意欲は高まると考えられる。2 回生ではアイデンティティの確立が高くセルフ・エスティームが低いほど、より不適應感を抱きやすいと考えられる。大学不適應感とセルフ・エスティームの間には負の相関がみられた。学業意欲に関しては、アイデンティティの確立、精神的自己、セルフ・エスティームを組み合わせることが有効だと考えられる。男子ではアイデンティティが確立され、精神的な受容がなされていなく、現状の自分に満足できていないほど学習意欲が高まるという結果が示された。女子ではアイデンティティの基礎が高まることで学業意欲が高まることが考えられる。自己形成がなされているほど大学生活に適應しているのではないかと考えられていたが、必ずしもそのような結果ではなかった。



## 引用文献

- Ackerman, N. W. 1958 *The psychodynamics of family*. New York: Basic Books.
- 藤井義久 1998 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68, 441-448.
- 福島章 1989 性格と適応. 本明寛・依田明・福島章・安香宏・原野広太郎・星野命(編) 性格心理学講座 3 - 適応と不適応 -. 金子書房, 3-37.
- Greenacre, P. 1970 Youth, growth and violence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 25, 340-359.
- 星野命 1970 感情の心理と教育. 児童心理, 24, 2445-2477.
- 小林哲郎 2000 大学・学部への満足感. 小林哲郎・高石恭子・杉原保史(編) 大学生がカウンセリングを求めるとき. ミネルヴァ書房.
- 近藤邦夫 1994 生徒と教師の関係づくり: 学校の臨床心理学. 東京大学出版会.
- 宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容に関する縦断的研究. 教育心理学研究, 36, 258-263.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self image*. Princeton Univ. Press.
- 佐々木正宏 1992 適応の基礎. 大貫敬一・佐々木正宏(編) 心の健康と適応. 福村出版, 123-144.
- 沢崎達夫 1993 自己受容に関する研究(1): 新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, 26, 29-37.
- 沢崎達夫 1994 自己受容に関する研究(2): 男女大学生における自己受容の様相を中心として. カウンセリング研究, 27(1), 46-52.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—. 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 反町あゆみ 1994 帰国高校生の「適応感」に関する研究—その規定要因と時系列変化について—. カウンセリング研究, 27, 1-10.
- 菅千索・菅真佐子・菅佐和子 2006 対人援助職を目指す学生の適応と情動知能ならびにセルフ・エスティームとの関係. ヒューマン・ケア研究, 7, 20-34.
- 杉村和美 2005 関係性の観点から見たアイデンティティ形成における移行の問題. 梶田淑一(編) 自己意識研究の現在. ナカニシヤ出版, 2, 77-100.
- 田中存・菅千索 2007 大学生活不安に関する心理学からのアプローチ. 和歌山大学教育学部紀要, 57, 15-22.
- 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係. 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 八木●・篠原彰一 1989 適応行動について. 末永俊郎・金城辰夫・平野俊二・篠原彰一(編) 適応行動の基礎課程: 学習心理学の諸問題. 培風館, 1-9.

## 参考資料

### 適応尺度(4段階評定)

- 1 大学生活になじんでいると思う
- 2 大学の「講義」に満足している

- 3 大学生活が楽しい
- 4 入学した学部が自分に合っていないような気がして不安である
- 5 今の大学を選んでよかったと思う
- 6 大学生活で充実感や満足感を覚えることがある
- 7 大学生活で孤独感を覚えることがある
- 8 大学を退学したいと思うことがある
- 9 できることなら、転学あるいは転部したくて仕方がない
- 10 この大学にいと、何か不安な気持ちになる
- 11 こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがある
- 12 現在、積極的に学業に取り組んでいる
- 13 現在、学業以外に悩んでいることがある

### アイデンティティ尺度(4段階評定)

- 1 私は自分なりの価値観を持っている
- 2 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる
- 3 私は、興味を持ったことはどんどん実行していく方である
- 4 私は十分に自分のことを信頼している
- 5 自分の生き方は、自分で納得のいくものである
- 6 自分にまとまりが出てきた
- 7 自分は何かをつくりあげることのできる人間だと思う
- 8 社会の中での自分の生きがいが増えてきた
- 9 私は、魅力的な人間に成長しつつある
- 10 私は、自分の個性をとて大事にしている
- 11 私は人と活発に遊べない
- 12 私の心は、とても傷つきやすく、もろい
- 13 私は人が見ているとうまくやれない
- 14 異性との付き合い方がわからない
- 15 自分一人で初めてのことをするのは不安だ
- 16 私は、どうしたらよいかわからなくなると自分の殻の中に閉じ込めてしまう
- 17 まわりの動きについていけず、自分だけとり残されたと感じることもある
- 18 自分の中には、常に漠然とした不安がある
- 19 私は、やりそこないをしないかと心配ばかりしている
- 20 何かしているより空想にふけっていることが多い

### 自己受容尺度(5段階評定)

- 1 知性
- 2 生き方
- 3 やさしさ
- 4 まじめさ
- 5 明るさ
- 6 のんきさ
- 7 責任感
- 8 思いやり
- 9 やる気
- 10 忍耐力(がまんする力)
- 11 積極性(自分から進んで行動すること)
- 12 協調性(人との関係がうまくやれること)
- 13 情緒安定度(気持ちがいつも落ち着いていること)
- 14 決断力(迷わないで物事を決める力)
- 15 指導力(リーダーとして人をひっぱる力)

SE尺度(4段階評定)

- |   |                                     |    |                         |
|---|-------------------------------------|----|-------------------------|
| 1 | 私は少なくとも、自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人間だと思う | 5  | 私は自分自身に対して前向き態度を取っている   |
| 2 | 私は自分にはいくつか見どころがあると思う                | 6  | 私にはあまり得意に思うことがない        |
| 3 | 私はすべての点で自分に満足している                   | 7  | 私は時々確かに自分が役立たずだと感じる     |
| 4 | いつでも自分を失敗者だと思いがちだ                   | 8  | 私は時々自分がまるでダメだと思う        |
|   |                                     | 9  | もう少し自分を尊敬できたならばと思う      |
|   |                                     | 10 | 私はたいいていの人がやれる程度には物事ができる |